

[サンプル論文]

どうすればよい論文になるのか？

タイトルは
疑問文にする。

-- 初学者が「アホちゃうか？」と思われるマチガイを避けるために --

朴勝俊(環境経済学担当)

2012年1月13日

(2014年4月20日改訂)

「**節立て**」して
小見出しを付ける。

1. はじめに

多くの大学生が形式と論理の整った論文を書くことができない。何度繰り返し説明を行っても、指示に反する論文が量産されてゆくことに教員たちは頭を抱える。論文に含まれる誤りは、問題提起や結論が無いもの、論証になっていないものといった内容上の問題から、文体がおかしいもの、段落分けを行っていないもの、参考文献の示し方や参照方法が間違っているものなど、形式的な誤りまで多種多様である。文章はコワイ。話し言葉と違って、書かれた論文はすぐに誤解を改めたり身振り手振りで補ったりできないので、書き方や形式が誤っていると、どんなに素晴らしい内容を書いても読み手に「アホちゃうか」と思われるので注意が必要である。

疑問文としての問題提起。

学生の多くはなぜ正しい論文が書けないのか、どうすればきちんとした論文が書けるようになるのか、を、この論文は明らかにする。この論文の注意に従って、形式を真似て書くことによって、大学一年生でも(内容はさておき)形式の整った論文が書けるようになるはずである。

ある程度内容の分かる
小見出しを番号付きで。

2. なぜ学生の多くは正しい論文が書けないのか？

なぜ、学生の多くは正しい論文を書いて提出しないのか。それには様々な理由が考えられるが、最大の理由は教員の指示が伝わっていないこと(あるいは教員が指示をしていないこと)であろう。なぜなら、適切な指示に従って書けば、誰でもある程度は正しい形式で論文が書けるはずだからである。おそらく、授業中に説明された内容は、すぐに忘れられてしまうか、ノートに記録されないか、あるいはたとえ記録があってもそれを読み返して論文を書くことがないのである。また、論文の書き方に関する本(例えば、戸田山 2002)を紹介して読むように勧めたとしても、それを参考にしていけば生じるはずのない誤りが多くみられる。そういった学生は、紹介された本を全く読まないであろう。

文献の参照方法。

メモをとらず、それでいて忘れっぽいタイプの学生に授業中にいくら指示を出しても、成果は限定的である。また、本を読まない学生に本を紹介しても何ら効果はない。そこで、なるべくページ数が少なく、実際の論文に類似した「雛形」が必要であると考えられる。わずか4ページの本論文こそがそれである。教員はこの論文を配布し、これをよく読みながら論文を書くように指導し、またこのスタイルに違反している箇所があれば

レポートは減点すると宣言すればよい。他方、学生はこの論文を読み、この論文を真似て、指示に従って書けばよい。

3. 「問答の文章」としての論文の形式

論文とは「問い」と「答え」と、その答えが正しいことの「論証」を備えた文章のことである。そのことを教わずにレポートや論文の課題を出された学生の多くは、学術的意味の無い「感想文」を提出する。それではいけない。

そうならないよう、初心者は論文の表題（タイトル）を疑問文とすべきである。つまり、「なぜ〇〇なのか」、「どうすれば××が解決するのか」、「▲▲は本当か」などの疑問文による問題提起をタイトルで行う。そうすると、少なくとも論文に「問い」が備わるし、おのずとその問いに整合的な「結論（答え）」が必要となる。そして、当然ながら、その答えが正しいことを示すための論証（既存研究、文献的な証拠、定量的分析、考察、など）を書かねばならなくなる。書き手は、まずそれらを準備せねばならない。

その上で、必ず「^{せつだて}節立て」をすべきである。「^{しょうだて}章立て」と間違える人が多いが、たいていはそうではない。「章」とは、数十～数百ページある大論文や本（書籍）の中で、十数～数十ページの文章の塊を意味する。初心者の論文は、せいぜい数ページから十数ページであろうから、「章」というとその全体にあたる。その一部を示すのは「節」であり、数行～数ページの分量にあたる。節には必ず、節の内容を要約的に示した「小見出し」を、番号とともに付けるようにしよう。

ちなみに、筆者は学生に、1. はじめに、2. 内容（本論）、3. 結論、という構造で書くように指導したことがある。そうすると、素直にその通りに「2. 内容」（または「2. 本論」と書かれた小見出しを付けて、数ページにわたりすべての議論をここに押し込めて、さいごに「3. 結論」として終わる論文が多く届けられたので、わが不明を深く恥じ入った。中には、「2. 内容」の中で何ページにもわたって一度も段落分け（改行）をしていない、ひどいものもあった。内容・本論の部分は、さらに小分けして、具体的なタイトルを付けるようにされたい。また、適宜段落分けをしてほしい。

段落分け、改行

1字あける

ところで、一部の学生の論文には「結論」がなく、「考察」なる節で終わっていたが、これではいけない。必ず結論が必要であり、考察はその結論を導くために、結論の手前に置くべきものである。また結論で新たな事実や考えを初めて提示するのもよくない。

なお、論文の「1. はじめに」で、「私がこのテーマを選んだのは・・・」などと主観的に書き出すものもあるが、これは格好良くない。読み手にとっては書き手の動機など、たいていは重要ではないので、テーマ・問題が「すべての人々」にとって、なぜ重要なのか、なぜ興味深いのかという観点から、客観的に述べる方がよい。

論文の最後には、必ず正しい書式で、「参考文献」のリストを付けねばならない。これは業界ごとにスタイルが多少異なるが、ここでは筆者の専門である経済学系の論文誌

で多く見られるスタイルを、論文の末尾に示したので、初心者はまずこれを真似てほしい。本論文では、和文の書籍と雑誌論文、英語の書籍と雑誌論文をいくつか示した。参考文献を見て、どのような記号が使われているかに注目してほしい。和文著書の場合は著者名、年号（括弧に入れる）、書名（二重カギ括弧に入れる）、出版社名を、そして和文論文の場合は著者名、年号、論文名（カギ括弧に入れる）、雑誌名（二重カギ括弧に入れる）、巻号、ページ範囲、を示す必要がある。英文著書の場合も構造は同様であるが、カギ括弧は用いられない。論文名を引用符（‘シングル’または“ダブル”）で囲み、著書名や雑誌名は斜体（イタリック）とする。手書き論文の場合は斜体の代わりに下線を引いてもよい。和文の書誌は著者名（名字）の五十音順に並べる。英語の書誌は、著者名（名字をなまえの前に置く）のアルファベット順に並べるようにする。

4. アホっぽい文章にならないように。

まじめに書いているつもりでも、読み手にとって「アホっぽい」文章になることがあります。ここでは、本文自体をアホっぽい文章で綴ることで、書き手に注意を促したい。

論文は基本的に、「だ・である調」で書かなければならない。しかし、そうならないものもあります。この段落のように、「だ・である調」と「です・ます調」との混合が起こると、大変にアホっぽい文章になることが分かるであろう。分厚い論文のたった一カ所でも、文体の混合を起こしてはいけません。

また、文章中に同じ言葉が繰り返されるのもよくないのだ。これは、読み手にとって気持ち悪いのだ。同じ言葉が繰り返されると、なんだか、別の言葉を繰り返さずに使って欲しいと感じられるのだ。英語やドイツ語などの場合、同じ言葉が繰り返されるのを避けるために、同じ言葉を繰り返す代わりに、形の異なる同義語を使って、同じ言葉を繰り返すのを避ける場合が多いため、同義語が豊富なのだ。繰り返しが好ましくないのは単語やフレーズだけでなく、文末についても同じなのだ。だから、文末はなるべく少しずつでも変えた方がいいのだ。

そして、体言止めをしないこと。体言止めは多くの児童が中学・高校で国語の授業で習い、使用が奨励される技法。しかし、これらが用いられるのは詩や小説。大学の授業で書くべきなのは論文。論文の中では、体言止めされた文はアホっぽい文。

最後に、「～と思います」という表現は、主観的な、根拠の無い考えのように見えまですので、説得力を失うので良くないと思います。ですから、そういう表現は使って欲しくないと思います。

この段落に書いてあることは、決して真似をしないで欲しいと思います。

5. 論証のための参照や引用

初学者でも熟練者でも、何らかの問いを立てて答えを出す場合には、既存研究を調査してこれらを参照・引用することから始めよう。自分の結論を支持するような分析事例

や実験結果を説明した記述を見つけ、これを紹介する場合には、必ず、自分でその分析や実験を行ったかのような誤解を与えない記述にせねばならない。さもないと、虚偽や盗作になってしまう。

従って、〇〇が2007年に行った実験によれば、××の2011年8月の調査によれば、などと記述しよう。他の人が書いた文章であっても、きちんと「カギ括弧」に入れて、参照の形で出典を示しておけば、盗作にならないし、かえって論文の信頼性が高まる。戸田山によれば、「他人が考えてくれたことと自分が考えたこととがきちんと区別されないと、それは「パクり」、つまり剽窃ということになる」(戸田山2002、p.233)。

カギ括弧で引用、括弧で参照

5. 紙の使い方

筆者は、初学者の場合や、大規模講義の場合には、ワープロで作成された論文やレポートを認めていない。なぜなら、ワープロの場合は「コピペ」(コピー&ペースト、インターネット等で調べた他者の著作の一部を機械的に丸写しする行為)が容易であり、こうした盗作論文を提出する者が多いためである。レポート用紙に手書きさせると、多くの学生が、用紙の左端ぎりぎりいっぱいから、右端いっぱいまで文字を書く。このようにすると、左端をホチキスで留めたり、穴を開けてヒモを通したりした場合に、文章の一部が読めなくなる。左右両端2センチ程度は空白にしておくべきである。

最後の結論の中に、「答え」が必要です

6. 結論

本論は、多くの大学生が(初めて)書く論文が、どのような形式的な間違いを起しやすいか、なぜアホっぽくなりやすいかを明らかにした。多くの場合、その理由は「雛形」つまり「お手本」がないためである。そこで、「雛形」を作成し、その中で注意書きを充実させ、これを学生たちに配布することにした。これに従って書いた学生は、少なくとも形式的には整った論文を書くことができるであろう。

ただし、この論文は内容面の問題に踏み込んでいない。本論文はあくまで、形式的な側面を論じたのみである。どのようにすれば、内容的に優れた論文が書けるのかについては、その分野・課題・内容に即した十分な調査や分析、つまり勉強が必要となる。これは今後の課題としたい。

論文の限界や今後の課題を書いておくとよい

参考文献

ぶら下げインデント(2行目以降を自動的に2.5字下げ)

茅田 美有紀(2011)「学部教育における日本語のレポート作成指導」『長崎大学留学生センター紀要』19、pp.65-73 [※論文の場合]

戸田山和久(2002)『論文の教室 レポートから卒論まで』NHK ブックス [※本の場合]

山内史朗(2001)『ぎりぎり合格への論文マニュアル』平凡社新書 [※本の場合]

Chin, Beverly (2004) *How to Write a Great Research Paper*, Jossey-Bass.

英語の書名は斜体

Ford, James E. and Dennis R. Perry (1982) "Research Paper Instruction in the Undergraduate Writing Program", *College English*, Vol. 44, No. 8, Dec., pp.825-831.

雑誌名は斜体。巻号やページ範囲も必要

※手書き論文の場合、英語の書名・雑誌名には下線を引くとよい